

果てない青空を自由に翔けていく白い鳩。白く美しく咲き誇る梨の花。私の住む白岡市では今年も、白い鳩と梨の花が春の始まりを教えてくれた。

新しいクラスにも少し慣れてきたある日。ニュース番組を見ていると、手に持っていたリモコンを思わず落としそうになるニュースが流れてきた。なんと、白岡市の市道の二か所に、大量のがれきの山が不法投棄されていたというのだ。がれきの山は、道路を完全にふさいで通行不能にしていた。現場の近くに住む農家の男性は、テレビのインタビューに応じると、眉を曇らせながら、

「事情はあるんでしょうけど、ちょっとふざけてますよね……」  
とこぼしていた。その声と表情が、頭の中を何度もループして離れなかった。

約二週間後、がれきの撤去作業が完了して道路を通れるようになったとインターネットで知ったときは、祝福より先に安堵がやってきた。そして、画面をさらにスクロールしたとき、衝撃的な一行が目飛び込んできた。

「市は撤去費用として予備費から五五六万円を計上」  
つまり、白岡市民が白岡市に納めた「税」が、がれきの撤去に貢献したということである。これを理解したとき、脳内に映ったのはあの農家の男性の笑顔だった。「税の力」に痛いほど気づかされた、初めての瞬間だ。

一か月後、部活動の部長として生徒総会に出席した。一人あたり一〇〇円の生徒会費が学校生活を充実させている。そう再認識したとき、はっとした。「税」といっしょだ。税も生徒会費も、豊かで充実した毎日を過ごすためには、かけがえのない存在なのだ、と。

いままで毎朝、当たり前前に教室に入って、当たり前前に教科書を机にしまって、当たり前前にイスに座り友だちと喋っていた。しかし、この当たり前前の朝は、すべてだれかが納めた「税」によって成り立っている。もしも明日「税というしくみをなくします」と突然言われたら、きっと私は……。この十五年間ずっと、「税の力」に甘えてしまっていた。

この日本のどこかに、私の学校や教科書、机やイスのために納税してくれた人がいる。その人の顔も名前も、知る由もない。だが、もしもその人に会えたら、うるさいと言われるまで何度でも「ありがとう」と伝えたい。

来春三月、私は九年間の義務教育を終える。白い鳩が果てない青空を自由に翔ける姿が、自分で決めた進路へと飛び立つ私と重なる。どのような大人になるべきだろう。白い鳩は平和の象徴、梨の花は希望の象徴と言われている。ならば、私は「税の力」で日本に平和と希望を運ぶ大人になりたい。

将来の日本を担う世代として、納税という形で「税の力」を引き出し、日本に貢献という名の恩返しをする。これこそが、私たち将来世代の究極の使命ではないだろうか。